

昨年度まで技術委員会は、11月に行われる「八王子市民大会」の決勝戦をレポートしてきたが、今年度からは中央大会につながる「さわやか杯決勝リーグ」をレポートすることとした。

9月2日（日）、素晴らしい天然芝の富士森競技場に12ブロックの一次リーグ、二次トーナメントを勝ち上がってきたプリメイロスSC（日野市）、OK・SC、松が谷SC、大和田SCの4チームが集まり、時折激しい雨が降る不安定な天候の中で決勝リーグが始まった。今回のレポートでは八王子市内のチーム同士が対戦した中の「大和田SC 対 松が谷SC」と「OK・SC 対 大和田SC」の2試合を報告する。（この大会は11人制で行われる大会である。）

$$\text{大和田SC} \quad 2 \left\{ \begin{array}{l} 1-0 \\ 1-0 \end{array} \right\} 0 \quad \text{松が谷SC}$$

両チームとも4-4-2のフォーメーションであった。立ち上がりは双方とも相手の出方をうかがうような慎重な試合運びで、なかなかシュートまで持ち込めなかった。7分大和田が右CKからボランチの25番がヘディングシュート放ったが、松が谷GK1番の正面であった。前半10分、松が谷は早くも選手交代、2トップの一角である12番をアウトさせ19番を投入した。この交代は後半にも行われ、松が谷コーチ陣が両者を競わせていることがうかがえた。11分、大和田陣地の中央やや右寄り、松が谷が直接FKを獲得。これをボランチの10番が蹴り、ゴールの枠をとらえたが大和田GK55番がしっかりとキャッチした。（大和田のGK55番は、味方に対し「〇〇、□番につけ！」といった具体的な指示をよく出し、ペナルティエリアの外まで積極的飛び出す素晴らしいプレーを連発していた。）12分、今度は大和田が松が谷陣地の右寄りからの直接FKを得る。これを左利きのキャプテン23番が直接狙ったが、松が谷GKがキャッチした。このシュートもゴールの枠をとらえており力強い素晴らしいシュートであった。14分、松が谷陣地左奥での大和田のスローイング、簡単にリターンをして中央へクロスを送り、ゴール前の混戦から大和田FW65番がシュートを放つが、GKの正面であった。大和田が押し気味に試合を進め、17分ついに均衡が破れる。松が谷GKがこぼしたボールに大和田の左MF27番が飛び込み、倒れながらプッシュしてネットを揺らした。18分、松が谷はキックオフからボールを運び中盤からロングシュートを放つ。これを大和田GKがセービングでかろうじてはじき出した。思い切り良く放たれたこのシュートは、意表をついた素晴らしいシュートであった。19分、大和田65番が後方からのバウンドしたボールを、倒れこみながらボレーシュートを放った。これは松が谷GKの正面ではあったが、どのような体勢からでもシュートを狙おうとする65番の意識は素晴らしかった。前半のアディショナルタイム、松が谷ボランチの10番がバイタルエリアまで押し上げ、右サイドからの横パスを受けた。ここで10番は大和田DFのアプローチを右足のアウトサイドフックでかわし、シュートを放った。惜しくもGKの正面であったが、これも相手DFを良く観た素晴らしいプレーであった。このまま大和田1点リードで前半を終了した。

後半の立ち上がり、1点ビハインドの松が谷は大和田陣地へと押し込んだが、シュートを打つまでにはいたらない。4分大和田ボランチの25番が、右サイドを駆け上がる56番に対して絶妙なスルーパスを通した。56番はそのままシュートしたが、残念ながら松が谷GKの正面であった。このスルーパスを通した大和田の25番は、小柄ではあるが非常に視野が広く、相手DFラインの背後を丁寧なパスで突こうとする意識が高く、今後の成長が楽しみな選手であった。9分には松が谷のFW19番が右へ流れ、スルーパスが通った。シュートまではいたらなかったが松が谷がCKを獲得した。このよ

うに両チームとも、駆け上がる味方に対するスルーパスを通す技術と戦術眼を持っており、さすが決勝リーグまで勝ちあがってくるチームだなと思わせた。11分、松が谷陣地のやや右サイドに攻め上がった大和田がFKを獲得する。これをセンターDFの59番が強烈なキックでゴールの枠に飛ばし、松が谷GKがこぼしてしまった。このこぼれ玉を大和田65番がプッシュして追加点を奪った。13分、大和田左サイドの27番が後方からのパスをハーフターンで素早く前を向き、スピードに乗ったドリブルで松が谷のペナルティエリア内までボールを運んだ。これは判断のスピードとプレーのスピードが共に速い、素晴らしいプレーであった。15分、今度は松が谷が中盤の10番と11番のコンビネーションでボールを運び、FW9番へのスルーパスを通した。これは大和田DFのスライディングにより松が谷のCKとなったが、綺麗なコンビネーションであった。19分、松が谷はFW9番がボールを受け、押し上げてきた11番に名前を呼びながらボールを落とした。これは松が谷が、普段の練習からパスをする相手の名前を呼ぶことを習慣づけていることをうかがわせる良いプレーであった。20分、大和田の右サイドの56番が松が谷陣地に攻め上がった。松が谷のDFに追いつかれたが、56番はスクリーンターンによってボールを保持し、交代して右サイドDFに入っていた71番に丁寧に落とした。この場面は、もし56番が簡単にクロスをあげようとするれば、松が谷DFに当たり、ボールを失ってしまったであろう。71番がきちんと押し上げて56番のサポートの入っていたことも含め、大和田がチームとしてボールを保持（ポゼッション）する意識が高いことをうかがわせた。このような一進一退の攻防が続いたが、タイムアップとなり大和田が2-0で逃げ切った。

両チームとも丁寧にボールを繋ごうとし、ボールをもらう側の動き（オフ・ザ・ボールの動き）も質が高く、レベルの高い試合であった。大和田の方が相手ゴール前で、難しい体勢でも可能な限りシュートを打とうとする意識が高く、その差が点差となって現れたと言える。また2点とも松が谷GKのこぼしたボールを押し込んだ得点であった。GKには、キャッチが難しいシュートやクロスが来た場合は、ボールを弾き飛ばす技術と判断力も求められる。世界のトップレベルのGKや日本代表の川島も、ボールを弾き飛ばす素晴らしい技術と判断力を身に付けている。今後の練習の参考にして欲しい。

またこの両チームは、ハーフタイムに出場した選手をベンチに座らせ、コーチ陣がベンチ前に立ってアドバイスをしていた。“プレーヤーズ・ファースト”の意識が高い指導者であることがうかがえた。多くのチームに参考にしていただきたい場面であった。

$$\text{OK} \cdot \text{SC} \quad 1 \quad \left\{ \begin{array}{l} 1-0 \\ 0-0 \end{array} \right\} \quad 0 \quad \text{大和田SC}$$

大和田は松が谷戦と同じく4-4-2、OKは運動量と突進力のある10番をワントップに据えた4-2-3-1のフォーメーションであった。この試合は立ち上がりからOKが大和田を押し込んでいった。キックオフからOKの10番が大和田ゴールに迫り、放ったシュートが右ポストかすめる。3分にはOKのトップ下25番がバイタルエリアで粘り、押し上げてきたボランチの30番に落とし、30番はそのままシュートを放った。このようにOKの分厚い攻撃が続いた。一方の大和田も、4分には27番が左サイドを突破し中央にクロスをあげ、OK・DFのクリアしたこぼれ玉を奪い反撃する。10分、大和田のゴールキックに対して「ゴールキックをカットしよう！」というOK選手の大きな声がピッチに響く。OK右サイドDFの27番がゴールキックを奪い、トップの10番にフィードする。これに対して大和田GK55番が、判断よく飛び出してCKにののがれた。11分、トップの10番から押し上げてきたボランチの30番へ、さらに左サイドの17番へとパスが通り、シュートが放たれた。この

シュートは大和田GKの正面ではあったが、3人の綺麗なコンビネーションプレーであった。12分、OKの10番が大和田陣のペナルティエリアの左サイドまでボールを運び、左足の深い切り返しから右足でクロスをあげた。このクロスは大和田GK55番がパンチングでクリアしたが、このプレーは判断力と勇気を伴った素晴らしいプレーであった。大和田GK55番は14分にも、OKボランチの30番から10番に出されたスルーパスに対して、勇気を持って飛び出し、10番と交錯しながらもピンチを防いだ。このように大和田はGKを中心に粘り強く守り、時折カウンターを狙っていくが、流れを変えることはできない。16分、OK10番が大和田陣の右サイドで仕掛ける。いったん跳ね返されてしまうが、再び10番がボールを奪い、中央をよく観て正確なクロスをあげる。これを左サイドからゴール前に上がってきた17番が落ちていてヘディングシュートを決めた。17分、大和田ツートップの一角である65番がミドルレンジから思い切りよくロングシュートを打ったが得点にはいたらぬ。OKが押し気味のまま前半が終了した。

後半立ち上がり、OK10番がハーフウェイライン手前の左サイドから右の13番への速いサイドチェンジパスを通した。13番は足の裏も使いながらドリブルでゴールに迫るが、大和田DFに止められる。それを拾ったトップ下の25番が再びドリブル突破を試みる。OKはボランチの30番も長いドリブルで突破を試みるなど、前線の5～6人の選手が、相手に隙があればDFラインをドリブルで突破しようとする意識をハッキリと持っており、大和田を押し込んでいった。3分、大和田が右サイドの56番を走らせ、後方の右サイドDF71番が積極的に+。押し上げていく。大和田のこの右サイドを崩そうとするパターンは、ハーフタイムにコーチ陣から指示されたのか、後半に何度も繰り返された。しかし・・・OKは大和田のこのパターンで生じるスペースを突いてくる。5分、左サイドの17番が中盤で前を向き、大和田71番が上がったスペースに流れ込んだ10番にパス。10番はフリーでボールを受け、パス&ムーブで素早く上がってきた17番に低いアーリークロスを出した。これは大和田GK55番が飛び出して防いだが、ビッグチャンスであった。

前半と同様、OKは10番にボールが入ると、そこが起点となりゲームの組み立てが進む。しかし単純な縦パスが続くと、OKベンチのコーチからは「サイド！サイド！」と大きな声で指示が飛んだ。いくら個人のドリブル突破力があっても、狭い範囲でそれを繰り返せばスペースが無くなり、行き詰ってしまう。後半立ち上がりOKが見せたようなサイドチェンジをすることで、ドリブルで切り裂く相手DF間のギャップが広がる。“攻撃はワイドに”の原則を選手に意識させる的確な指示であった。13分、再び大和田右サイドの56番がOKのDFラインを突破し中央へフィード、それを37番がシュートするが、OKのDFが体を張ってブロックした。14分、今度はOK左サイドDFの26番が、大和田56番へのパスをカットし、そのままドリブルで大和田陣地まで攻め上がる。この時間帯は大和田右サイド（OK左サイド）での見ごたえのある攻防が続いた。16分、OKのセンターDF7番が滑ってしまい、大和田FWの65番がフリーでシュートを放つ。これをOKのGK50番が左足でクリアした。ここで失点すればゲームの流れは大きく変わった可能性もある。このプレーは、65番をよく観たGK50番のビッグプレーであった。終了間際にも大和田のFW23番が左サイドで粘り中央へフィード、ボールを受けた65番がGKをかわしたが、そのボールが大きすぎ、再びGKに止められてしまった。このように大和田は最後まで反撃を試みたが、OKのゴールネットを揺らすことができず、そのまま試合終了となった。

OKはトップの10番を中心に、個々の選手のドリブルによる突破力が高く、終始大和田を押し込んだ。松が谷戦では両サイドに有効なスルーパスを通して大和田の中盤も、守備におわれる時間が長くなった。ゲームの中で相手を押し込むことのできるドリブルによる突破は、ジュニア年代でその意識を植え付け、実際に試合の中でプレーさせることが重要である。この年代でその意識を持つことのできなかつた選手は、パスをすることしかできない選手となってしまう。指導者の皆さんには、

少々の失敗には目をつぶり、スペースがある場面ではドリブルで相手に仕掛けることを選手達にやらせて欲しい。目先の試合に勝つことを優先し、相手陣地に単純にボールを蹴りこむことばかりをさせているのは、個々の選手の力は伸びていかない。この点では、自分の陣地からの長い距離のドリブルも自由にさせていたOKのコーチ陣には感謝したい。12ブロックを通過したOKと大和田には、中央大会でさらに質の高いプレーをして活躍して欲しい。そして、松が谷の選手達にもジュニアユース年代でさらに羽ばたいて行ってくれることを期待したい。

<技術委員会からのコメント>

ゲームレポートの中で、いくつかのプレーに関するコメントをしてきたが、皆さんのジュニアユース年代でのさらなる飛躍を期待し、技術委員会からアドバイスを送りたい。

今年度の試合は、昨年度にレポートした試合よりもレベルの高いものであった。昨年度のレポートの「技術委員会からのコメント」では、個人戦術の基本を攻撃と守備の両面にわたってまとめ、以下の3点についてコメントした。(お読みになっていない方は、ぜひ昨年度のレポートを読んでください。)

- 1 ボールをもっと大切にしよう
- 2 1対1の攻防を繰り返し練習しよう
- 3 ピッチを広く使おう／もっと広い視野を確保しよう

今年度の試合では、DFやGKが簡単にボールを蹴り出す場面が少なかった。また1対1の攻防がピッチのいろいろな場面で数多く見られた。さらにスルーパスやサイドチェンジパスも何度も目にする事ができた。こうした点では、今回のピッチにたった選手の皆さんに昨年度のようなアドバイスをする必要性はあまり感じなかった。皆さんの更なる成長に期待したいのだが、1点だけ気になることがあったのでコメントする。

ゲームレポートで多くの選手の素晴らしいプレーをほめた。その中の何人かの選手が、自分がパスをしたのに味方の選手が走っておらず、そのパスが通らなかった時や、自分が要求しているのにパスが来なかった時などに、天を仰いで悔しがっていたのである。それは1秒か2秒のわずかの時間ではあるが、その時間が非常にもったいないと感じた。おそらくその選手の心の中では「ア～ッ！何で走っていないんだよ～！」とか「ア～ッ！どうしてパスを出さないんだよ～！」という気持ちが湧いているのであろう。しかし、サッカーは足でボールを扱うスポーツで、非常にミスが多いスポーツである。手でボールを扱うバスケットボールでは、時には100点以上の得点が入るが、サッカーでは10点以上点が入ることは滅多にない。味方のミスのたびに天を仰いでいるのは、その分だけ次のプレーにうつるまでに時間がかかってしまう。悔しがるのはボールがアウトした時や試合が終了した時にして、ボールが活着ている時にはミスが起きてもすぐに次のプレーを考えて欲しい。そのことによってより判断の速いゲーム展開ができるようになる。

ジュニアユースさらにユース年代になるにつれ、身体能力が高くなり、走るスピードやパスのスピードがアップしてくる。それに伴い、判断のスピードも上げていかなくてはならないのである。常に先を考える素晴らしい選手へと皆さんが成長してくれることを期待している。